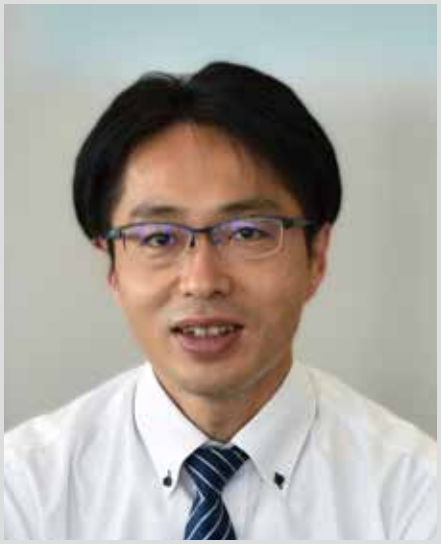
かお・人・interview

2020年11月17日

部長インタビュー



国土交通省　九州地方整備局
道路部 部長

沓掛敏夫氏

toshio KUTSUKAKE

九州管内道路事業の中心である道路部は、
道路ネットワーク、維持管理、防災・減災対策の要だ。
とくに全国から注目されているのは
熊本県内で行われている、ふたつの権限代行工事。
平成28年熊本地震の復旧事業と
球磨川にかかる橋の10橋が流失した7月の豪雨災害だ。
毎年のように自然災害が頻発するからこそ、
平常時や災害時にも、安定的な交通網が期待される。
三つのインフラ基盤づくりで、安全・安心な
道づくりを考える、沓掛部長に話を伺う。

Q 部長就任にあたっての抱負

6月末の赴任後すぐに、令和2年7月豪雨災害が発生。熊本県を中心に広範囲で大雨が続き、県内の道路被災や球磨川にかかる10橋が流出。被害は広範囲にわたったことから、道路の早期復旧が急務となり、国の権限代行で迅速に進めています。災害対応に加えて、防災・減災の強化は急務だと再認識しました。

就任に当たっての抱負としては、三つの「インフラ基盤づくり」を進めて行きたいと思います。ひとつは「強靭な基盤」です。災害が多発する近年は、災害時にも耐えうる強い道路整備が求められます。緊急時の輸送機能、救援活動など、地域住民の暮らしを守るには、道路機能の強化（維持管理、補修など）が必要です。

▲国道219号の被災状況調査（熊本県球磨村）

次に「競争基盤」です。物流・経済・観光が循環するには、ネットワーク社会の促進が必要不可欠です。九州はアジアのゲートウェイ。地理的優位性で海・陸・空の交通利便性が高い。さまざまな場所から、農産物、製品、部品などが届きますが、未整備の部分は競争の優位性が弱くなるので、この未整備部分であるミッシングリンクの整備を推進し、地域経済強化を後押しする競争基盤を作りたいと考えます。

最後は「生活の基盤」です。点と点を結ぶような大きなネットワークも大事ですが、街や地域の魅力を引き立てるような道路づくりを整備したいと考えます。これら三つの「基盤」を整備することで、活力ある地域が生まれ、結果的には都市の魅力向上にもつながると考えています。

▲被災直後の西瀬橋（人吉水俣線）

Q 赴任先の思い出

赴任先はどこも思い出がありますが、直近の首都高速道路(以下、首都高)に出向していたとき、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会の輸送に関する仕事に携わりました。首都高は片側一車線、もしくは二車線がほとんどのため、オリンピック専用レーンの導入は難しく、日常的に渋滞する道を、どのように活用するか頭を悩ませました。その結果、首都高の料金を時間帯によって変える「ロードプライシング」の導入です。

選手やその関係者などが、安全かつ時間通りに会場に入ることを優先しなければいけません。また、一方では、物流を円滑に動かすことも必要です。真夏の競技会ですので飲料水などの食品物流は増加します。それらの輸送対策も考慮する必要がある。開催は延期になっていますが、世界最大のスポーツイベントに携われた経験は得難いものでした。関係機関と連携し、システムや枠組みを作り上げた達成感は忘れられないものです。

Q 権限代行の取り組み

7月に豪雨災害が発生し、国道219号は並行して流れる球磨川氾濫のため激しい被害を受けました。これによって球磨川にかかる橋梁10橋が流失、国道219号を始め市町村道などが甚大な被害を受けています。

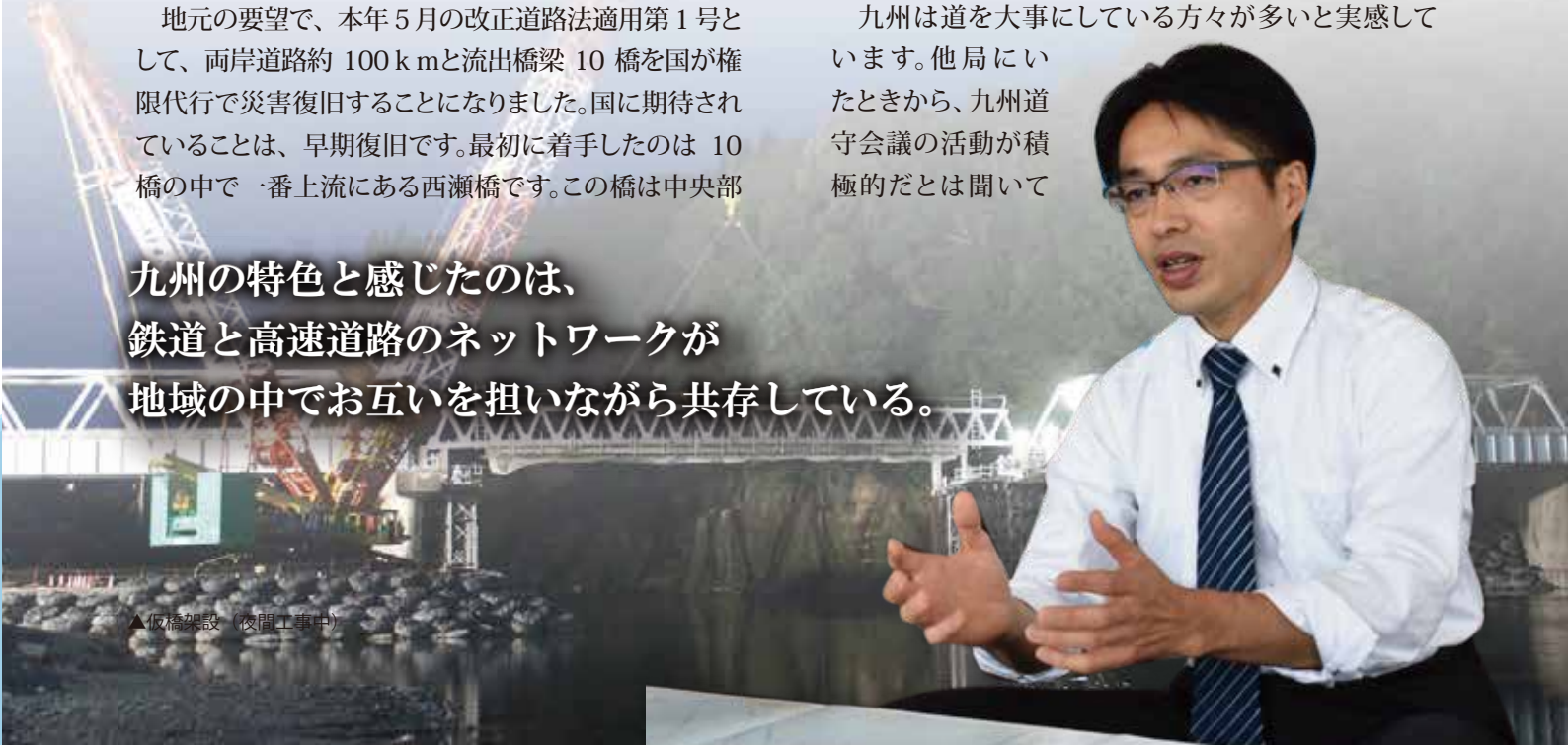
地元の要望で、本年5月の改正道路法適用第1号として、両岸道路約100ｋｍと流出橋梁10橋を国が権限代行で災害復旧することになりました。国に期待されていることは、早期復旧です。最初に着手したのは10橋の中で一番上流にある西瀬橋です。この橋は中央部分の一部が流出しただけでしたので、九州技術事務所保管の仮橋を流失部分に架けなおすことができると判断しました。

▲仮橋を利用する小学生

取り組みから約2か月、仮橋は国土技術政策総合研究所の技術者が橋脚の強度や欠損以外の点検など、さまざまなチェックを行い完成しました。この西瀬橋は小学校の通学路になっており、地元の住人はもとより、生徒6割が利用していました。夏の暑い時期に小学生は2キロの迂回を余儀なくされ大変だったと思います。流失した橋の中には橋脚が失われたものもあり復旧にかなりの時間を要します。改めて、強靭なインフラの重要性を感じました。

Q 地域との連携・協働面について

九州は道を大事にしている方々が多いと実感しています。他局にいたときから、九州道守会議の活動が積極的だとは聞いて



九州の特色と感じたのは、
鉄道と高速道路のネットワークが
地域の中でお互いを担いながら共存している。

▲仮橋架設（夜間工事中）

写真提供：九州地方整備局

いました。住民の方が自主的に道路清掃をしたり、花壇に花を植えたり、活発な活動には頭が下がります。実行力や取り組みの姿勢など、道を愛する姿は想像以上でした。

地域住民が協力し合い、自分の住む町を花で彩る。行政と民間で情報の共有をしながら、協働で道を育てています。九州の道を管理する立場として、道守の活動は大変心強く感じます。都市の骨格を作っているのは道路、そこに住む人々の営みなど、景観とまちづくりはセットです。コロナ渦によって、以前と同じような活動は難しいと聞いていますが、協議しながらこの状況を乗り越えていければと思います

Qwith コロナへの取り組み

公共事業に新型コロナウイルスが、影響を与えた一年です。コロナの収束は未だに見えず感染リスクも変わりません。一番重要なのは、新型コロナウイルスの感染防止を徹底することです。

対策をしっかりと実行するには、受注者側はコスト的な負担を強いられます。発注者はそれに対し、対策費（マスク、消毒液、体温計など）に対する支援を考える必要があります。また、工事については、本来は年度内に終わる工事がコロナの影響で年度をまたいでしまった場合、次年度の工事受注に影響する場合がありますが、今年度は柔軟に対応することで様々な配慮をしています。建設資材の調達ついても、円滑な調達が困難な場合は、他地域から資材を調達する必要がありますが、この輸送費を発注者側と協議。また、提出する資料の簡素化など、できる限り業界の声を受け止めながら取り組んでおります。

Q 地域建設業界への要望、メッセージ

地域の生活や経済を支える建設業のみなさんとは、強力なパートナーだと考えています。7月の豪雨災害のような緊急時には真っ先に駆けつけて、昼夜を問わず前線で働いていただいています。周辺住民の方も頼もしい存在と思っているのではないでしょうか。これからの強靭な国土づくりには、我々の技術力と業界の行動力、その歯車を合わせる必要性を強く感じます。

毎年のように起こる災害に対し、災害復旧や防災・減災の対策など、業界が担う役割は重要です。だからこそ建設業が魅力ある職場になるため、担い手の確保や育成、4週8休の取り組み、働き方改革に対して環境整備が求められています。現状を少しでも改善するために、できるだけ多くの声を聞かせて欲しいと思います。安心安全に直結するインフラ整備は、地域業界の活躍がなくてはできません。その役割を継続していただくため、受注機会の確保、適正な工期確保などしっかり取り組んでいきたいと考えます。

Q 趣味や健康法について

体を動かすのは好きですので、学生時代は少林寺拳法の稽古で汗を流していました。今は運動の代わりに、自転車通勤を 10 年以上続けています。周辺の景色の変化を感じ、鳥の鳴き声を聞きながら通勤していると、通勤時間も楽しくなります。街の景色を身近に感じるからこそ気づくことも多々あります。たとえば、九州はバスの交通量が多く、路肩周辺が痛みやすい。裏筋に自転車で走れるような道があると走りやすくなるなど、通勤しながら街並みの道を考えています。

赴任してからの数か月は、災害対策に追われて時間がありませんでしたが、先日、太宰府天満宮に自転車で行きました。京都の大学でしたので、北野天満宮は馴染みの神社です。こちらに赴任することが決まったとき、同じ菅原道真公を祀る太宰府天満宮は、ぜひ訪れたい場所でした。京都から飛んできた「飛梅」を見て、太鼓橋で池を眺めるなど、ゆっくりした時間を過ごせました。道の様子を知るためにも自転車で、街の魅力を発見したいと思います。

プロフィール

出身地：石川県
生年月日：S42 年 3 月 30 日（52 歳）
H 3 年3月　京都大学工学部　土木工学科卒業
H 3 年4月　建設省入省
H21年4月　中部地方整備局　岐阜国道事務所長
H27年4月　道路局　企画課道路事業調整官
H29年5月　道路局　企画課道路経済調査室長
H30年7月　首都高速道路株式会社　本社　計画・環境部長
R 2年6月　九州地方整備局　道路部長